

松下山政経塾への熱い願い



PHP総合研究所取締役
第一研究本部長

谷口全平

なぜ松下山政経塾を設立するのか

松下山幸之助は昭和五十三年九月十二日、大阪北区の電子会館で松山電工会長丹羽正治氏（当時）とともに久々に記者会見を行ない、二十一世紀の日本を担う政治家や指導者を養成するために、神奈川県茅ヶ崎市に私財七十億円を投じて、財団法人「松下山政経塾」を設立することを発表した。八十三歳のときである。

「かねてより私個人として考えていたことでございますが、今日はそのことを皆さんにお話しさせていただこうと思えます。それは何かといえますと、一言でいうと人材の養成機関『松下山政経塾』をつくるということでありませう。それを今日は皆さんにご披露もつしあげて、

同時にそのような立派な基本哲理が確立されても、それを力強く具現していく為政者をはじめ、各界の指導者に人を得なければ、これは無きに等しいのである。幸いにして、天然資源には恵まれぬわが国ながら、人材資源はまことに質の高い豊かなものがある。まさに人材、とりわけ将来の指導者たりうる逸材の開発と育成こそ、多くの難題を有したわが国にとって、緊急にしてかつ重要な課題であると言えよう。

私たちは、このような観点から、真に国家国民を愛し、二十一世紀の日本を良くしていこうとする有為の青年を募り、彼らに研修の場を提供し、国家経営の基本哲理を探究しつつ、実社会生活の体験を中心とした各種の適切な研修を実施するための、松下山政経塾の設立を決意した。

この政経塾においては、これらの逸材がその研修を通じて、人間とは何か、天地自然の理とは何か、日本の伝統精神とは何かなど、基本的な哲理を考察、研究するとともに、日本の大本となるべき国家経営の理念や企業経営の理念、ビジョンを探究確立し、もって政治、経済、教育をはじめ、日々の社会活動はいかにあるべきかを、社会体験の中から幅広く総合的に自得し、併せて強い信念と責任感、力強い実行力を体得するまで育成することを目的とするものである。

私たちは、この研修によって、正しい社会良識と必要な理念、並びに経営の要諦を体得した青年が、将来、真の為政者として、あるいは企業経営者など各界の指導者として、日本を背負っていくとき、そこに真の繁栄、平和、幸福への力強い道が開けてくるとともに、世界各国に対しても真に貢献することができるものと確信するものである。

このような松下山政経塾が、広く国家国民の期待に十分に応え、積極的かつ恒常的に活動していくためにも、公共的機関として運営推進するのが肝要と思う。よってここに、財団法人松下山政経塾を発足させる次第である（この趣意書は後に若干整理され短くなっている。）

何かと皆さんのお教えを乞いたいとかよつに考えまして、お集まりいただいたような次第でございます。

それでどくどく申し上げるよりも、書いたものを読みましたら、だいたにお分かりくださると思えます。で、後で皆さんのご質問も頂戴いたしまして、個々にお答えしたいとかよつに考えております」

「財団法人松下山政経塾設立趣意書」の内容が読み上げられた。

「わが国は、終戦後、経済を中心として目を見張るほどの急速な復興、発展を遂げてきた。そして今や一面に世界をリードする立場にまでなってきたのである。しかしながら、日本の現状はまだまだ決して理想的な姿に近づきつつあるとは考えられない。昨今は、その経済面においても、不況、円高をはじめ、幾多の難問に直面し、低迷の様相を呈しており、国民の多くは雇用や生活の不安に陥っているのである。さらにまた、青少年の非行や犯罪の増加をはじめ、食糧やエネルギーの長期安定確保の問題、高率な税金の問題、調和ある人間教育の欠如、あるいは思想や道義、道徳の混迷など、いろいろ挙げると、物的繁栄の裏側では、かえって社会各般にわたって、矛盾、不調和、非能率が日一日と深まり、国民の精神はますます混乱に陥りつつあるのではないかとも思えるのである。

これらの原因は、個々にはいろいろあるが、帰するところ、その大本となるべき国家経営の基本理念に、いささか欠けるものがあるのではなからうか。正しく明確な国家経営の基本哲理があれば、そこから力強い政治が生まれ、その上に国民の経済活動、社会生活も安心して営むことができ、ひいては国民の平和、幸福、国家の安定、発展ももたらされるのである。

したがって、今日の国の姿をより良きものに高め、進んでは国家百年の安泰を図っていくためには、国家国民の物心一如の真の繁栄を目指す基本哲理を探究していくことが、なによりも大切であると考えらる。

政経塾は三十数年前からの私の念願の結晶である

引き続き塾生募集要項が紹介されたが、それはおよそ次のようなことであつた。

塾生は全国から募集し、応募資格は、その年の大学卒業予定者、大学院在学または修了予定者、大学卒業後三年未満の社会実務経験者、高卒者で三年以上、五年未満の社会実務経験者など。

年齢は、学歴、職業のいかんを問わず二十五歳以下とし、特別優秀な者は二十八歳まで認める。研修年限は五年間で、原則として全寮制である。そして、研修の特徴は、自分の問題意識をもとに実践的、体験的に学ぶ「自修自得」である。

五年間の研修期間終了後、塾生は修了審査の結果及び本人の希望に従い、政治家、研究者、事業家として進む。政治家を希望する塾生は、中央または地方の議会に、本人の希望する政党から、もしくは無所属で立候補する（この募集要項は、現在年齢は三十五歳以下、研修年限は三年間等に変更されている）。

「どつという動機でそれを考えたかといえますと、これは三十数年前にさかのぼるのでありますが、終戦直後、社会が非常に混乱し、また松下電器も復興しなければならぬ状態でありました。そういう窮状の中でどつという姿を何とかしなければと思ひ、PHP運動を開始したのであります。私はそのときの状態を目のあたりにして、果たしてこれが人間のほんとうの姿なのだろうか。たしかにこれが人間の一面の姿かもしれないが、それにしてもあまりにも悲惨ではないか。いや人間には原則として繁栄・平和・幸福が与えられているのだ。なぜならば、人間が長い間求めてきたものは、まさしくそれだからだと、まあ私は私なりに考えたのであります。そのときの思い、そのときの窮状を何とかしなければならぬと思つたことが、今回の塾設立の動機で

あります。したがって、この塾設立は決して一朝一夕に考えたものではありません。三十数年前の私の念願の結晶であるわけであり、

松下は、塾長には自分が就任し、副塾長を丹羽正治氏にお願いし了承を得たむね述べ、その後、記者の人たちからさまざまな質問を受けた。「今の政治をどう思っているか」という質問に対しては、「いまの日本の政治には多くの改良しなければならない問題点がある。例えば、代議士の数一つとっても多過ぎる。『船頭多くして船山に登る』という状態で、非常にムダなことをやっている。日本は、ほぼ一言語、一民族、アメリカなどの多民族国家と比べればもともと効率のよい政治ができてしかるべきだ」という持論を展開している。そして、「愛のない政治、慈悲のない政治はダメです。いまの政治にはどうもその愛なり慈悲が足りないように思う。このままでは二十一世紀の日本は……と思うと、やはりこうした人材を養成する機関は必要ではないか」と付け加えている。丹羽氏も横から、「これは松下相談役の止むに止まれぬ思いからなのだ」と補足した。結局、その日の記者会見は一時間半以上にも及んだ。

政治がよくならなければ人々の幸せもない

松下幸之助が政治や社会に対して発言を始めたのは第二次世界大戦後のことである。戦前は、一般の国民がそうであったように、松下も、産業人は産業人としてみずからの仕事に精一杯取り組み、政治、国家のことは政府や政治家に任せておけばいいという考え方であった。

しかし、その結果が敗戦であった。社会は混乱し、国民は食べるに食糧がなく、住むに家がないという悲惨な状況に陥った。こうした状況を目のあたりにし、また自分自身、GHQ（連合国軍総司令部）から公職追放や財閥家族の指定など七つの制限を課せられ身動きの取れないような状態になって、公憤を覚えることとなる。

ない。松下が、もちろん政治啓発運動も必要だけれど、やはり国を動かす良識ある政治家、指導者をつくらなければならぬと考えるようになっていくのは必然的な流れであつたらう。

松下政経塾への執念

昭和四十年の秋、松下は新幹線の中で秘書に、「政治家養成塾」をつくりたいと打ち明け、ついではその趣意書を作るようにと命じている。それは、今日の政治家は、官僚出身か労働組合出身か、あるいは名前のよく知れたタレントなどに限られている。果たしてこれだけでよいのか。もともと最初から理想を持って政治家をめざし、さまざまな実験を重ねて人間や社会というものをよく知った見識ある人物が政界に出ていけるようにすべきではないか、ということであった。

松下は何か大きなことを実行するときに決して無理はしなかった。

実行するにあたっては、親しい人たちにそのことについての意見を求めた。そして、賛同が得られなければまだ時期尚早と思いつめた。このときもそうであった。その後、ある会合で、作り上げた政治家養成塾の趣意書を読み上げ、意見を問うている。そのときその会に出席していた人たちから、「松下さん、それは止めたほうがよい。政治に手を出してはいけない」と言われ、計画を保留している。

この時期、政治家養成塾を思い立たせた一つの要因は、山陽特殊鋼の



入塾式で挨拶する松下幸之助

「国民活動すべてに影響を及ぼす政治が安定し、よくならなければ、まともな企業活動もできないし、国民の幸せもない。政治をしつかりしたものにするために、産業人といえども、一国民として政治に対して提言していかねばならないのではないか。これから国民には「片手にソロバン片手に政治」という気持ちが必要だ」

昭和二十一年十一月三日、PHP研究所を設立したが、その動機の一つもそこにあつた。松下は、人間の本质とその本質に則つた社会のあるべき姿を研究するとともに、できることなら国民運動を起して、よりよい日本を再建しようとしたのである。PHP研究所設立以降その年末までに四十数回、翌年の昭和二十二年には二百四十回ほどの講演や懇談を重ね、みずからの思い、願いを懸命に訴えている。

しかし、昭和二十五年になって、松下と松下電器に課せられていた制限が解け、日本の復興のためにも会社の経営に打ち込まざるを得なくなつて、PHP活動を縮小していった。同年七月に行なわれた松下電器の緊急経営方針発表会で、「PHP運動を外部に呼びかけることを止めにした」と、経営に専念することを幹部社員に宣言している。

しかし、松下の政治に対する思いは変わらず、その二年後、知識人、経済人を糾合し、関西と関東で、新しい政治啓発活動、新政治経済研究会を立ち上げることとなる（このことについては本誌の本年春季号で詳しく述べている）。

この活動は、一言で言えば、「真の民主主義を日本に根づかせる運動」であった。昭和二十六年一月より四月まで三月月間、初めてアメリカを視察して、「アメリカの繁栄は民主主義によつていて、民主主義こそ繁栄主義である」と感じ取り、日本にも真の民主主義を早急に根づかさねばならないと考えたのである。松下はこの運動に数年間は力を入れていた。しかし、世の中はなかなかいい方向に動かない。政治家は相変わらず派閥抗争に明け暮れ、汚職と疑獄事件があとをたた

倒産や山一證券の経営危機等を招いた昭和三十九年から四十年にかけての不況であつたにちがいない。戦後、だんだんと政府の力が大きくなり、経済活動までを規制し、大きな影響を与えるようになった。景気不景気も、もはや経済人の力だけではいかんともしがたいようになって、松下は、「今日の不況は政治不況の様相を呈し始めているのではないか」と感じ取り、今のうちに見識ある国家のリーダーを育てなければ大変なことになるといふ危機感を持ったのではなかつたらうか。

いったんは計画を保留したものの、その後も政界の黒い霧事件、共和製糖事件、あるいは東大の安田講堂事件等々、次々に起こる事件に、政治に対し不安と不信を抱くようになり、そのつど、「何とかしなければ」の思いから、政治家養成塾の構想を持ち出している。そして、またそのつど誰かに意見を求めているのである。

昭和四十八年、石油ショックが日本を襲つた。経済は深刻な不況に陥つて、国家も企業も総赤字となり、破滅の淵に追いやられつつあつた。松下はその状況を憂え、『崩れゆく日本をどう救うか』を緊急出版した。それは、日本の政治、日本の社会に警告を發し、具体的な改革の方向を示すものであつたが、その書籍の帯にこのようなコピーを入れている。

「物価は千倍、賃金は千三百倍、だが国費は実に一万三千倍。（昭和十年基準）

なぜ政治にこんなに金がかかるのか。このままの姿勢を政治がとり続け、根本的な改革を断行しなければ、たとえお互いの決意と努力で物価を現状のままで維持できたとしても、国費は二万倍、三万倍と増え続け、ほどなく、日本はゆきつまり崩れ去るだろう」

松下は政治を「統治（ガバメント）」ではなく、「経営（マネジメント）」と捉えていたが、あまりにも口先の多いやり方に我慢がならな



かったのである。

さらに、五十一年二月、アメリカの上院から火が点いたロッキード事件で国会は空転し、政治は大混乱に陥った。松下は、「ロッキード事件も追及しなければならぬことだが、議論しなければならぬ問題が山積しているではないか。何か問題が起こって右往左往するのは、国家経営の基本理念をはっきり持っていないからだ」と腹立たしい思いであった。

同年十一月、PHP研究所創設三十周年の記念出版として、『私の夢・日本の夢 21世紀の日本』を発表、壮大な二十一世紀のビジョンを、混迷する日本に提示した。松下は、これは単なる夢物語ではない、このビジョンに向かって、政治家を中心に国民一丸となって力を合わせれば、必ず輝かしい未来がひらけてくる、と訴えたのである。

この段階で、政治家養成塾の構想を何人かの人に相談したときには、時代が要求していたのか、松下の飽くなき執念にほだされたのか、もはや反対する人はいなかった。

松下は、まだ二十代の若き日、富士のすそ野の広大な土地に工場と学校を建設して、物の生産と教育を同時に行なうことを夢見たことがあったが、富士山の見える湘南地方に松下政経塾を設立、昭和五十五年四月一日の開塾式には、健康が優れなかったにもかかわらず、「何としてでも出る」と言って出席した。そして入塾生に、「この五年間で、かりに卒業して、すぐに文部大臣なら文部大臣をやれと言われても、それをやれるというぐらいの見識を養ってほしい。それぐらいのことは十分できるはずだ」と訴えた。また、寮のそれぞれの部屋には、みずから心を込めて書いた「大忍」の色紙を飾っている。この書には、「大きな志を持って大きな忍耐が求められる。大きく忍び、大いに忍

んで大志を遂げてほしい」という松下の願いが込められていた。

理想の政治をめざして

平成元年四月二十七日午前十時六分、松下幸之助は九十四年の生涯を閉じた。卒業者は志を継ぐ決意を次のように述べている。(同年六月一日発行『松下政経塾報』)

「理想的な政治というものは、『国民に平和で豊かな生活を保障しつつ、国家財政も健全にする』ことだと思います。甚だ難しいことです。が、一歩でも近づける事に生涯をかけるつもりです」(五期生・高市早苗・その年の春卒業、当時政治家志望、現衆議院議員)

「松下塾主から学んだことも、とくに『このこと』というわけではなく、できるだけ大きく、機に応じて塾主の知恵を活用できるよう努力しようと思っています。何よりも塾主が政経塾を創設した背景には、現状の政治に満足できないで新しい形の改革・革新が必要との認識があったわけだから、私たちも現状に満足せず、いつも新しい可能性を求める姿勢でなければいけませんね」(一期生・小野晋也・当時愛媛県議会議員、現衆議院議員)

「塾主とのお別れと自分自身の気持ちの整理をするために、妻を伴って大阪での密葬に参加しました。葬儀の列の中、塾主の理想を実現するために日本人の意識改革こそが必要なのではないかと改めて考えていると、『そんなに焦って、きばりなはんな。体に気をつけて、しっかりおやり』という塾主の励ましを聞いたような気がしました」(二期生・長濱博之・当時長濱工業取締役業務部長、前衆議院議員、現在政治活動を展開中)

松下は、政経塾がスタートして一年たったとき、新聞記者に「二十一年の初めに政経塾の卒業生はどのようになっているでしょうかと問われて、「二十五人ぐらいの国会議員が当選してしまっしやる。毎



塾生との語らいのひと時

年、卒業生のうち政治家志望者が十五、六人として、これから十五年で二百五十人。十人に一人当選と勘定すれば……。そうなれば今の新自由クラブより多くなりますな。ちょっと言い過ぎかもしれませんが……」と答えている。

いま塾出身の国会議員は十六人を数えている。それぞれがそれぞれの場で大いに活躍するようになって、松下が頭に描いていた姿にも近づいてきた。

今日の危機的状況を考えるとき、もはや現状を手直しするといった小手先の発想では改革はできるものではないであろう。松下は、「もういっぺんどこかの国に占領してもらって、改革をしてもらわなければしょうがないのか」と嘆いたことがあったが、すべてを白紙に戻して、まさに「何が正しいか」「何を今なさねばならないのか」という視点からの抜本的な改革が求められているのである。このようなときに、過去のしがらみにとらわれた人たちにそのことができ得るだろうか。国民もそのことに気がついてきているのか、少しずつではあるが時代の風向きが変わってきているように思えてならない。政経塾出身者にとって力を存分に発揮できる絶好のチャンスが来ているといえるのではなからうか。

二十一世紀まであと一年余、そのとき松下の理想を受け継いで、どのような人がどのような思いで政治家として活躍しているであろうか。新しい世紀に、日本が世界の国々からも尊敬され、頼りにされる国家になるためにも、一丸となって抜本的改革への指導力を発揮してほしいものである。

塾是(建塾の精神)

真に国家と国民を愛し、新しい人間観に基づく政治・経営の理念を探究し、人類の繁栄幸福と、世界の平和に貢献しよう

塾訓(基本の心構え)

素直な心で衆知を集め、自修自得で事の本质を究め、日に新たな生成発展の道を求めよう

五誓(日常の行動指針)

一、素志貫徹の事

常に志を抱きつつ懸命に為すべきを為すならば、いかなる困難に出会うとも道は必ず開けてくる。成功の要諦は、成功するまで続けることにある。

二、自主自立の事

他を頼り人をあてにしている事は進まない。自らの力で、自らの足で歩いてこそ他の共鳴も得られ、知恵も力も集まって良き成果がもたらされる。

三、万事研修の事

見るもの聞くことすべてに学び、一切の体験を研修と受けとめて動しむところに真の向上がある。心して見れば、万物ごとくことく我が師となる。

四、先駆開拓の事

既成にとらわれず、たえず創造し開拓していく姿に、日本と世界の未来がある。時代に先がけて進む者こそ、新たな歴史の扉を開くものである。

五、感謝協力の事

いかなる人材が集うとも、和がなければ成果は得られない。常に感謝の心を抱いて互いに協力しあってこそ、信頼が培われ、真の発展も生まれてくる。